

ま え が き

ここに「高層気象台彙報」第76号をお届けする。「高層気象台彙報」は、高層気象台の業務に係る技術開発・改良や試験・調査・研究の成果をとりまとめ、広く社会に知らしめることを目的として、印刷物、あるいは当台ホームページを通じて年一回刊行している。

気象庁は、高層気象台の他国内15地点において高層観測を行っている。また、分光光度計によるオゾン観測は札幌及び那覇でも、精密日射観測は国内四か所でもそれぞれ実施されている。このような他の観測地点と比べて高層気象台をユニークな存在にしているのは、国際的な基準となる観測や準器の維持等を通じて、高い観測精度を保つとともに、世界とのトレーサビリティを維持する取り組みを行っていることである。その例として、基準ゾンデと業務で使用しているGPSゾンデの比較観測を定期的実施していることや、ドブソン分光光度計のアジア地区準器を維持していることなどが上げられる。そのような取り組みが認められて、平成30年5月には、高層気象台はGCOS基準高層観測網(GRUAN)サイト"TATENO"としての認証を受けることとなった。これらの取り組みによって、防災のみならず、地球環境の長期的監視にも堪える高品質な観測結果を得ることが初めて可能となっている。

本号では、高層の湿度に関する比較観測、分光光度計の国際相互比較、オゾン全量観測測器の特性調査、分光光度計や分光放射計の特性に関する調査と改良といった報告が行われる。これらはいずれも、高層気象観測、オゾン・紫外域日射観測及び日射・放射観測の精度向上あるいはトレーサビリティ維持を意識した調査研究である。このような地道な調査研究を積み重ね、その成果を公表することが、高層気象台に求められる役割を果たし、高層気象観測業務が発展するうえで重要であることを改めて指摘しておきたい。

最後に、本号掲載の各報告の査読を行っていただいた内外各分野の専門家の方々に深く感謝の意を表すとともに、それぞれの業務で多忙な中、技術開発や調査・研究等を行い、報告としてまとめ上げた当台職員の労を多としたい。

高層気象台長

里 田 弘 志